
転生した男と魔法先生

ミスターサー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生した男と魔法先生

【Nコード】

N4735V

【作者名】

ミスターサー

【あらすじ】

誤って殺された男は、転生する運命を辿る

貰ったのは仮面ライダーオーズの全グリード化と変身道具を二つ

転生先はネギまの世界、しかも原作より千年前に転生した

転生前

拝啓、父よ、母よ、妹よ

今、俺の前で綺麗な土下座をしている女の方が居ました

「すみませんでしたーあああ！」

「あの、一体、何の事で土下座を？顔を上げてください」

女の方は、顔を上げ、涙を流しながら俺に言った

「貴方を誤って殺してしまいましたあああ」

「・・・は？」

「実はですね、私は転生神の女神です・・・

あなた方、人間に言わせると輪廻に入る順番が有るんですが私の部下の不幸で死なせてしまいました

このままで逝くと、輪廻の輪に入れないんです」

「・・・ふざけるな」「ごめんなさい！」「なんてね、怒りませんよ」

「へ、な・・・なんで？」

「別に生き物には死が来るし、筆の誤りって言うし」

「つまり、仕方ないって受け止めるのですか？」

「まあね、だって・・・人間死んだら、ただの脱け殻ですよ、脱け殻」

「・・・珍しい方ですね」

「これでも坊主でして、さて俺の場合はどうなるんです?」

「あ、はい、先程言った通り、輪廻の輪に入れないので、貴方を転生します」

「転生か・・・」

「はい、場所は『魔法先生ネギま』の世界です」

「えっと、『ネギま』は確か・・・十歳の子供が魔法先生をするって話だったような」

「はい、だいたいそんな感じですか、ご存知でしたか」

「妹が無理矢理貸してきたんだよ、たく俺は特撮が好きなのに・・・あれ?質問なんだけど、俺が向こうに行ったら死ぬんじゃない?」

「あー、そうですね・・・特殊能力を付けておきます何が良いでしょうか?」

「うーん、グリード化かな・・・」

「仮面ライダーオーズのグリードですか?」

「うん、グリード化をお願いしたい
コアメダルは全て体内に入れてくれないですか？
オーズにもなりたいたので、ベルトもください」

「グリードの暴走と人を食らうのは？」

「無しでお願いします、人を食いたくないし、人に迷惑かけたくないです」

あ、五感は人間と同じように正常でお願いします」

「わかりました、最後に欲しい物はありますか？」

「・・・レンジャーキーと「ダメです、これ以上はチート過ぎです」
・・・シュリケンジャーの変身道具をください」

「わかりました、魔力は通常で気力は多くしておきます
原作から千年前になります、もし死にたくなったら紫のメダルを自ら破壊してください」

「わかりました、お世話になりました」

俺は足の方から段々消えてきていく

「ああ、最後に一言、そんな装備で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

そして俺は転生した

ぶっして！ぶっして！ぶっした！（W風

うーん転生して早くも三百年たったけど

「この者を魔女とする」

いや、なんかね？魔女狩りの時代が来ました（笑）

あ、皆さん知ってましたか？魔女狩りは中世ヨーロッパに行われて
ましたが十三世紀に行われたと言っ話も有ります

この世界は十三世紀に行われてるそうですね

「この者を捕まえる！」

「はっ！」

と、解説してる暇はなかったな・・・逃げよ

俺はグリードの一体、メズールになり液体化し、逃げた

「！？やはり魔女か！」

俺は液体化を止め、教会に向かう

町から出る前に助けようと思いましたがね、魔女達を

で、着きました！in教会！

「ちわー！魔女です！あんたら裁きに来ました」

あー、教会にいる皆さん驚いた状態でこっち見たな

「魔女が自分から来たぞ！」

「バカか？」

「うっさい、神父は誰？」

すると一人、優しそうな男性が出てきた

「我が教会に何しに来たのですか？」

「問いたいのさ、魔女の解る理由」

「神の声を聴きます」

「ならば俺は魔女なのか？」

「・・・貴方は、魔女です」

神は言っています、貴方は神の裁きを受けなさい」

「・・・ああ、残念だけど外れね
異端は貴様だったようだ」

俺はグリードのガメルになる

「っ！！聖水を！」

「聖水？効くかよ、俺は『バヤアアン』・・・最後まで言わせる！」

俺は聖水をかけられ、お返しに重力を操り、全員ひれ伏す

「さて」

俺は神父の方に向き、歩みよる

「神父さん、魔女達は、何処に、いる？」

ちなみに喋り方はガメルのように、ゆっくりな喋り方になっている
これは、各グリードの姿に変わる事により、喋り方も変わってしま
うのだ

「ち、地下に」

「案内、しろ」

「はっ、はい！」

神父だけ重力を元に戻し、地下に案内してもらった
で、見たのだが・・・最悪だ
色々な拷問器具、そして異様な臭いが混じって吐き気がきた

「・・・おい、神父」

「は、はい！」

「全員、解放しろ」

「へ？」

「聞こえなかったのか、二度と、言わん、殺されたい、か？」

「い、いえ、分かりました全員解放します」

「鍵を、寄越せ」

「は、はい！」

神父は怯えた顔で俺を見て、懐から鍵束を渡す

「ちょうど、五十か、ウヴァになるか」

俺は緑の昆虫グリッド、ウヴァになった

そして五十人に別け、全ての部屋の鍵を開けた

「あ、なんだ？」

「アンタ、なんで俺達を助けてくれたんだ？」

今は森の中、地下牢に入っていたのは約七十人
男は三十五、女も三十五だった

その内の代表格の男が俺に聞いてきた

「助けた理由？んな物は、要るのか？」

「だってアンタは、その」

「異形だから、お前らを食うと思ってんのか？食わんよ
俺は普通に獣の肉を食うから」

「そ、そうか」

「・・・あ、アレが見えてきた」

「え？」

俺は森の先に有る、出口を指さし、その方向を見せる

「あの村に住め、アレは二百年前に趣味で作った村だ
アレは、お前らにやる」

「い、良いのか？」

「もちろん、アレは魔女と呼ばれる者や、その可能性を秘めている
者しか見えない村だ
あそこで暮らすが良い」

そして代表格の男以外は走って村に向かう

「お前は行かないのか？」

「アンタの名前を聞いてから行くよ」

「名前？名前ねえ・・・なんだっけ？」

「は？」

「いや、真面目に名前を忘れたんだ
名前、名前・・・」

「・・・付けてやるっか？」

「あ、本当に」

「ああ、グリードって、どうだ？」

「グリード（欲望）、ピッタリだな
よし、グリードだ、今から俺はグリードだ
君の名は？」

「スプリングフィールド」

「スプリングフィールドか、ならスプリング
ここでサヨナラだ、達者に暮らせ」

「アンタは、一緒に暮らさないのか？」

「いや、俺は旅をしようかね・・・じゃ」

俺はアングの翼を出し、スプリングの目の前から去った

しばらくして、裏の世界で金貨千枚の懸賞金が掛けられていた
見た瞬間、俺はびっくりした

金髪の吸血鬼とグリード

「幸せは 歩いてこない」

アレから二百年たったから、西暦1500年

俺は森の中で暮らしている

俺は、その間にコアメダルの長所、短所の研究

亜種コンボのちょうど良い組み合わせを作っていた

後、最近・・・また懸賞金が上がりました

金貨五千枚増えました

わゝパチパチ

けど悪い事はしてない・・・

俺の首を取りに来た賞金稼ぎを気絶させたり、ボロボロにして追い返したりしていた

「・・・けど、暇だなあ」

俺はアクビをしていたら、魔法を使う気配を感じ、立ち上がる

「・・・三人か、面倒だな

シュリケンジャーになるか」

俺はシュリケンジャーの変身道具『シュリケンボール』を出し、シュリケンジャーになる

「行くか」

「はあ、はあ！」

「待て！吸血鬼！」

「誰が待つか！」

おいおい、来た瞬間に追いかけてるよ、成人男性三名が幼女を

しっかし、幼女の方は金髪だし、どっかで見たような・・・

とりあえず助けよう

俺は分身をし、一体を幼女の姿に変化して、本体の俺は煙玉を投げてる

「おい！なんだ！？」

「ゲホ、ゴボ！」

「なんだよ、この煙！」

よし

俺は、幼女を気絶させて、首元を持ち、自宅に持って行く

無論、分身は幼女の身代わりにした

「さて、どうするかな？」

変身を解いた俺は、イノシンの肉を焼いていた

幼女に会ったのは、昼なのだが、今では夕暮れ
なのにまだ気絶して、いや・・・眠ってる

あの男性三名達の悔しがる声が森に響いたのは十分前、流石に泣きはしないだろうが、諦めてるだろう

「うっ」

と、やっと起きたな

幼女は手で目を擦りながら辺りを見回し、俺と視線が合った

「な、なんだ貴様は！」

「貴様とは酷い、せつかく追っ手から逃がしてやったのに」

「なに？奴等の仲間じゃないのか」

「だったら助けない」

「・・・分かった、信じる」

「そりゃ良かった、腹減ってるか？」

「ふん、腹など減っ『グウ』・・・」

「やせ我慢するな、ほら獣肉だ、食べ安心しろ、イノシンのだ」

「・・・すまない」

俺は焼いた肉を皿に乗つけて、パンと一緒に渡す

「はむ、モグモグ」

「良い味だろ？三日間、塩漬けにした肉だ」

「まあまあだな、おかわり」

「はい、はい」

「で、君は何故、追いかけられてたの？」

「・・・それは、話す必要はない」

「訳有りか、嬢ちゃん・・・話をしたくないならしなくて良い
とりあえず名を言っておく、俺はグリードだ」

「グリード、欲望か」

「そ、欲望・・・二百年前に付けて貰った名だ」

「に、二百年前?!」

「俺は化物だからな、五百年も昔に産まれたのさ

けど呪いのメダルで外見が歳をとらない身体になった」

「・・・」

「ま、人は食わないよ・・・安心しろ」

「・・・そのメダルって、なんなんだ?」

「見たいのか?」

幼女はコクリと頷き、俺はセルメダルと赤のコアメダルを出す

「片面に動物の絵が有る赤、青、白、緑、紫、オレンジの色付きの
が元凶のメダルであるコアメダル

人間で言う魂みたいな物だ

今、見せてるのは赤のメダルの一枚だ

片面に×印が付いてるメダルがセルメダル、細胞の変わりだ」

「細胞？」

「ああ、そうか、細胞ってまだ解明されてなかったな
つまり、俺の身体の元だ」

「なるほどな」

「そうだ、嬢ちゃんの名前は？」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」

「長いな、エヴァで良いか？」

「・・・ああ、好きにしる」

「しかし何処かで聞いたような？」

「・・・」

「ま、気のせいか・・・さて寝るか
エヴァ、今夜は泊まれ・・・ベットを使っても良い
俺は椅子で寝るからさ」

「・・・ありがとう」

「別に気にするな、おやすみ」

朝、俺は起きるとテーブルの上に置き手紙があったのを見つけた

『一晩、世話になった・・・イノシンの肉とパンをくれた時は嬉しかった・・・ありがとう

パンと干し肉を少し頂いた

ちなみに私の正体は吸血鬼だ、昨日の奴等は吸血鬼ハンターだ

私は、お前に迷惑にならない為に逃げる

ではな、グリード・・・縁が有れば、また会おう』

「はあ、行っちゃったか・・・」

また会う、か・・・

とりあえず原作まで後、四百年ちょっとだな

魔法世界に行ってみるか

なんだっけ、なんとか防衛戦だっけ？

皆さん、お馴染みの欲望を集めるグリードです
九百歳を越えて、俺の目の前に『紅き翼』ってゆう、命知らずのバ
カが居ます

何故、このような事になったのか、簡易的に説明しよう

魔法世界に来た

しばらく武者修行

幼女誘拐した所を見かける

幼女助けた

(強制的に)雇われた

よし、防衛戦に出てくれと命令された・・・(強制的に)

紅き翼と遭遇 今、ここ

不幸だ・・・

「なあ、詠春・・・アイツ誰だよ？」

「おまつ！・・・魔法世界で最大ランクの賞金首『欲望の怪奇』を
知らないのか!？」

「へえ、『欲望の怪奇』か……いくら？」

「旧世界で言えば、一億ドルですよ、ナギ」

「へえ、なるほど……つまり強いんだな」

上から赤髪の青年、眼鏡をかけた二十代の剣士、赤髪の青年、フードを被った男の順だ

「お喋りは、終わりで良いか？早く帰りたいんだよ」

「なら！俺が相手だ！」

「！」

俺は、いきなり剣を投げつけられて紙一重かみひとえに避ける

が、避けられた剣は、後ろに居た一体の鬼神兵の首を吹っ飛ばした

「は？マジ？」

「今のを避けるなんて、やるなあ！」

「そりゃ、どうも……つかテメエ等『紅き翼』は、全員バグキヤラ？」

「いや、ラカンとナギだけじゃ……」

ラカンは剣を投げた男、ナギはニヤニヤ笑っておる赤髪の奴じゃ」

「ご説明ありがとう、えつと・・・」
「ゼクトじゃ、お見知りおきを」

「自分は『欲望の怪奇』グリードだ
さて、ウズウズして次の剣を構えてるラカン君に君達用の敵を造る
うか」

俺は、今まで身体に取り込んでいたセルメダルを五百枚の組を五個
出し、それぞれに赤、青、黄、白、緑のコアメダル十枚を真ん中に
入れた

そしてメダルが身体の形に出来てきて、人間版のグリード五幹部が
出来上がった

ちなみに昔、試しでガメルのコアをセルメダルの山に入れたらガメ
ルが生まれた

とりあえず、みんなのコアは、今まで俺の中に入れ、寝かせていた

「コウ、どコウ？」（。。。。）？

「知るか！」

「って僕達浮いてるよー！」

「本当だ!？」

「・・・てか、あの人達、誰？」

上からガメル、アंक、カザリ、ウヴァ、メズールのセリフだ

「あ、お父様・・・ここは？」

「なんとかブリッジ、今は防衛戦
お前らの体操の為に強い奴を選んだ」

俺に聞いてきたメズールに説明すると全員納得する

「俺は、赤髪を殺る」

とウヴァ

「なら僕は、日本人の剣士を」

とカザリ

「オレ、フード、被った奴を、選ぶ」

とガメル

「ふん、なら筋肉ヤローを選ぶか」

とアंक

「ちっちゃいボウヤは私が」

とメズール

「ま、好きにやってくれ」

俺は紫のグリードの羽を出し、空中を飛ぶ戦艦を落とすに向かった
グリード視点アウト

ナギ視点

「あ、待ちやがれ！」

アイツ、逃げやがった！

しかも他人（人？）に押し付けて！

「よそ見してる場合か？」

「って、うおい！」

俺はグリードって言う奴の方向を見ていたら、緑の虫ぽい奴が爪で
攻撃してきた
が、俺は杖でガードした

「やるなあ」

「ありがとよ、虫ヤロー」

「俺の名は、ウヴァだ！」

緑の奴は、ウヴァと名乗り、自ら距離を取り、分身をする

って

「東洋の神秘か！？オレより多いぞ！」

「俺は、最大で五十も出せる」

「二十しか出せねえ！くそ！負けた！
だったらデカイの決めてやる！」

百重千重と重なりて走れよ稲妻！」

「大呪文か！」

「千の雷！」

ドガアアアン！

・・・え？なんで避けなかったんだアイツは？

煙が無くなった同時に二体現れ、同時に
攻撃されて、吹き飛ば

「くっ！」

「ほづ、後から身を自ら跳んだか」

「・・・」

「ウォーミングアップって、オヤジは言ってたが、確かに楽しめるな
殺るっぜ、殺り合おうっ！」

「あぁ、けどよ」

なんで無傷？気になるんだが・・・

ナギ視点アウト

グリード視点

あー、ウヴァの奴・・・ちょっとキレたかな？

「と、よそ見してる場合じゃないな」

俺はオーズドライバーに紫のメダルを三枚入れ、スキャンし変身する

『プテラ！トリケラ！ティラノ！』

プット！ティラノ、ザウルス！』

俺はプトティラコンボになり、敵戦艦をメダガブリューで切り裂く

『（親父！！）』

念話か・・・しかもアंकからか

『（何？）』

『（ベルト使って良いよな？）』

『（かまわないよ、みんなも使って良いよ）』

ちなみに、みんなの分のベルトは神様から余分に貰った為、六個有る

『(なら使わせてもらっぜ)』

グリード視点アウト

アंक視点

「おい、筋肉ヤロー・・・奥の手を見せてやる」

俺はベルトを腰に装着し、メダルを填める

「おい、なんだ・・・それ？」

「ハッ！黙って見てろ・・・」

オレはベルトに填めたメダルをスキャンする

「変身」

『タカ！クジャク！コンドル！
タ〜ジャ〜ド〜ル〜！！』

「お！？姿が変わった！？」

「人間達で言えば魔法具だな・・・
他の奴等を見てみな」

オレは赤毛の敵を顎あごで指し、筋肉ヤローが見る

「オイオイ!?なんだ!そりゃ!?!」

「あ?ベルトとメダルに決まってるだろ、変身」

『クワガタ!カマキリ!バッタ!』

『ガータ、ガタ、ガタ、キリバ、ガタギリバ!』

「全身が緑になったああ!?!」

「ウルセエ……」

そして筋肉ヤローは他のメンバーの闘いを観ながら変身するシーンを見ていた

「『変身!』」

『ライオン!トラ!チータ!』

『ラタ、ラタ、ラトラータ!』

『サイ!ゴリラ!ゾウ!』

『サゴーズ……サゴーズ!』

『シャチ!ウナギ!タコ!』

『シャ、シャ、シャウタ!シャ、シャ、シャウタ!』

「お前ら……一体?」

筋肉ヤローはオレに問いてきたが、オレはこう言った

「さあな、簡単に言えば……オレ達は、仮面ライダーオーズだ

オレは、タジャドルだ！」

アंक視点アウト

グリード視点

「ふう、終わった・・・」

辺りを見回すと、敵戦艦の山でアंक達を見ると各々（それぞれの獲物を抱えている

「帰る？」

「賛成だ、アイスくれ」

「アंक、お前は本当に・・・」

「諦める、カザリ・・・アंकは冷たい物が好きだしな」

アंक達は話しながら獲物を地面に置く

「じゃ、帰る・・・あ、思い出した」

「何が？」

と思いだした俺にメズールは聞いてきた

「作戦名を」

「どんな、作戦、名？」

「たしか、グレートブリッジ防衛戦だったな」

俺は知らなかった、この後、俺達グリード一家は二つ名が付いたのを……

ちなみに俺達が雇い主の場所に戻った時に、グリード一家の二つ名を教えてもらった

グリード

『紫の竜』、『絶対氷河』、『戦艦落とす紫』

アंक

『紅き鳥獣』、『見えぬ紅き鳥』

ウヴァ

『増加の緑』、『増殖の使徒』

カザリ

『光の使徒』、『熱き太陽』

メズール

『水の巫女』、『蒼の鞭』

ガメル

『肉弾戦の戦車』、『重力を操る者』

だった、厨二だな・・・

英雄？ハツ、くだらん

「アリカ姫が幽閉されるそうだ」

「・・・へえ」

アリカ姫、元オステイアの王女だ・・・
時は、何年か経って戦争は終わった・・・
場は魔法世界のヘラス帝国に居る

「つか、親父・・・紅き翼と一緒に行動しないんだな？」

「・・・アंक、アイツ等に協力したのは、コッチの世界が滅びるのを阻止するために働いただけだ」

「が、帝国ではオヤジは英雄だからな」

「・・・アイスやるから少し黙れよアंक」

そう、俺は帝国で英雄扱いされていた

理由？それは「ぬ！グリード！何しておる！」

・・・この、じゃじゃ馬娘で有るヘラス帝国第三皇女のテオドラが
原因だ

戦争の最中、俺達グリード一家に有名になった防衛戦に一番協力し
たとテオドラは公表

犯罪者から英雄になったのだ

「・・・テオドラ、お前こそ何してる」

「む、妾は散歩じゃ」

「なるほど、俺は息子と世間話をしてるだけだ」

「そうか、アंकくすまないが席を外してくれぬかの
ちよつとグリードと話が有るのだ」

「なんでオレが！」

「アंक、アイス食ってこい
アイスバイキングって物が街でやってるから」

俺が決め手を言うとアंकは、ぶつぶつ言いながら中庭から去って
行った

「で・・・テオドラ、用件は？」

「アリカを助けられぬか？」

「アリカ姫を？・・・ふむ」

「無理かの？」

「いや、まずアリカ姫が居る国、オステイアは簡単に言えば空飛ぶ島
今回は魔力が無くなった為に災害みたいに堕ちた

これが無実の証明、結論だ

それだけじゃ足りない、無実の証明するカードがな」

「……それは、妾も考えておる」

「だがテオドラ、お前には、まだ切り札が有るだろ？」

「切り札？」

「元犯罪者の英雄が目の前に」

「!?!?ならぬ!それはならぬ!」

「なら聞こう、友を救うか……俺を救うか
どっちが良い？」

「……妾はアリカも主^{ぬし}も失いたくない」

「なに、俺は策が有る……」

「……策？」

「ながーい、歳月を使う策だがな」

グリード視点アウト

三人称視点

『さて、おはよう・・・連合のクソ元老院ども
今回はテレビ局をジャックして放送しよう』

「なんだ!？」

人々は見えていたテレビ局、全ての所にグリードの姿が映った

『まず、俺の名を言おう・・・グリードだ

貴様等、元老院は裁く相手を間違えたな

俺がアリカ姫の国、オスティアを落とした張本人だ

さて、連合のクソ元老院達よ・・・すぐにアリカ姫を釈放せよ、さもなければ一時間以内に解放しなければ一時間置きに百人殺す

これは脅しではない、本気だ・・・』

元老院の老人達は困った、まず英雄扱いしていたグリードが自らオスティアの島々を落とした張本人と言った

さらに、一時間内に解放しなければ百人に殺すと宣言
グリードは悪い顔をしながら更に伝える

『ああ、言い忘れてたが元老院達の家族から殺していこう
理由?まず、裁く相手を間違えた老害に精神的な罪を与えなければ
な・・・』

元老院達はアリカ姫の解放に急いだ、素早く迅速に

だが一人の元老院は気付いた・・・

何故、我々が濡れ衣を着せた女を救うのか？

元罪人であるからか？

理由は分からない、だが確実に言える事は、ただ一つ

罪人は罪人を庇った、そういう事だ

連合の元老院達は緊急の会議を行った

アリカ姫の解放、マスメディアの規制、そしてグリードの捕縛及び封印についてだった

三人称視点アウト

グリード視点

「んー、後一分か・・・」

後一分で皆殺しにしなければ、ならないのか・・・
殺すか・・・物騒な事をするようになったな

そう思い更ふけて居ると、連合に居る仲間だったクルトから個人ル

トのテレビ通信が来る

きつと、お怒りのテレビ通信だろうな・・・

「はい、こちらはグリードです・・・ご用件をどうぞ」

俺は通信を繋げた

『グリードさん！貴方！何をしてるんですか！！』

「何って、ナニだよ」

『ふざけないでください！グリードさん！』

「どうした、クルト？随分と慌てて」

『グリードさんの要求した案は可決、アリカ様の解放も認められました』

「なら良いじゃん」

『けど貴方は憎まれ役を交代したに過ぎないのですよ！？』

「良いんだよ、俺はかなり生きてし・・・それにほら、人間の一生は短いし

特に恋する乙女の命は短いって言うし・・・ん？上手いこと言ったかな？」

『グリードさん！ふざけてる場合じゃ！』

「と、次の要求をしなければな、じゃ・・・」

俺はテレビ通信を切り、席を立ち上がる

「罪人である俺は、何処に向かうのかは・・・運という風次第だな」

俺は次の要求を出した、「アリカ姫を連れて指定した場所に来い、
紅き翼のメンバーもだ

紅き翼からはナギ、詠春、ジャックラカンを呼べ・・・証人にする
連合の兵や帝国の兵を一切連れてくるな」

さて、これで少しは変わったかな風向きが・・・

場は死の谷付近

俺は、そこで横になっている

「・・・つか、ヤバいな

やっぱり罪人行為は始めてだから気が引くな」

「なら、止めるか？」

俺は立ち上がり、後ろを見るとアリカ姫が居た

どうやら先にアリカ姫が来たらしい

「やあ、姫さんか・・・久しぶり」

「久しぶりじやの、グリード殿」

「殿は要らんよ、罪人に戻るからさ・・・」

「・・・」

「え、その顔止めて、なんか本当に悪人だな・・・」

「主は、嫌じゃないのか？罪人になるのは」

「罪人にな、嫌だよ？けどな、罪人視点からじゃないと救えない者が有る

だから罪人になるのさ、恋する乙女の為にな」

「恋する乙女？誰のことじゃ？」

「アンタだよ、つかナギにべた褒めだろアンタ」

「な！違う！私は！」

「ふうーん」

「ニヤニヤするな！」

「はい、これで恋する乙女の本心が分かりましたわー、ぱちぱち」

「棒読みは、やめい！」

「っと、アンタとの最後の話し合いが出来た事だし、お別れだ……」

「な！？どういう意味だ！！」

「『氷結牢』」

ちょうど良くナギ達も飛んで来たし、さて……悪役になるか

グリード視点アウト

ナギ視点

アイツ、今……アリカに何をした
呪文をかけた……いや、かけやがった！

「グリード！」

「ん？お、来たか、紅き翼の証人達」

俺達は、着地し、グリードの後ろに有る氷の塊を見た
そして中にはアリカが居た

「アリカ姫とケンカしてな、五月蠅いんで凍り漬けにした
ああ、安心しろ……俺を倒せば姫は助かる」

「戦う理由が出来ただろ？」と言ってきた

「デメエ！」

「あゝ、そういうえば彼女は言ってたな

「ごめんなさい」って情けない声でな」

その瞬間、何かがキレた

ナギ視点アウト

三人称視点

欲望は笑い、赤髪の青年は憎しみを持って拳と拳がぶつかる
と同時に、欲望の蹴りが青年に当たり、青年は飛ばされる

欲望は人間から怪奇に変わり、恐竜の顔が有る斧を地面から出し、
追い討ちの様に斬りかかるが

青年は避け、怪奇の顔に魔力を込めた突きを放ち、突き飛ばす

完全な格闘ではない、だが子供のケンカみたいな生温い物ではない
人を一撃で殺す拳、殺す蹴りを怪奇と青年は放ち合う

怪奇は青年の攻撃はあまり効いてない

青年は怪奇の攻撃を一撃でも当たると死ぬ、そう思いながら避けな
がら、自身の魔力を込めた攻撃する

これが一週間続いた

怪奇は『英雄として罪人になりきった者』

青年は『仲間同士で協力し、世界を救った英雄』

彼等は奮う、力を・・・拳を・・・

グリード視点

「ウオオオオ！死ねナギ！」

「死ぬのはテメエだあ！グリード！」

一週間経ち、ナギは俺の懐に入り、胸に手を刺す

「グッ！」

「ッでえああ！」

そしてグリードのコアメダルを二枚抜き取り、ナギは距離を取った

「っ！ナギ！貴様！」

ナギが取ったのは、紫コアメダル二枚
プテラとティラノだ

そしての中に有るのは計八枚

「ハア、ハア・・・どうだ、グリード効いただろ？」

「ああ、効いたな・・・」

俺はセルメダルになっていく中、ニヤリと笑った

「・・・なあ、ナギ」

「あ？」

「アリカ姫と幸せに暮らせ、詠春・・・俺を封印しろ」

ナギは訳が分からないようだが、防衛戦の時、カザリと戦っていた
剣士、詠春の方に顔が向く

「分かった、オン！」

「！詠春、お前！」

「なに驚いてるんだよナギ、悪人は消える・・・それだけだ
あ、コアメダル返してくれ・・・俺がもう一人できたら怖いし」

そして筋肉・・・じゃ、なかった

ラカンはナギから無理やりコアメダルを奪い、俺に投げた

「あんがと、ラカン」

「ああ・・・後、お前の息子達は、詠春の知り合いのお偉いさんが預けてくれるそうだ」

「ん・・・サンキュー」

さて、まだかな・・・詠春

「おい！グリード！！」

するとナギが俺に言ってきた

「なんだよ？」

「テメエ！！なんでこんな事を！！」

「ハッ、理由なんて要るか！！俺は怪奇！

テメエ等は人間、歳をとり、死んでいくだろ！

あ、そうそう・・・アリカ姫をちゃんと守れよ」

俺は詠春を見ると、詠春は頷いた

「じゃ、そういうことで」

そして俺の身体はセルとコアになり、白い箱に入れられた

グリード視点アウト

昔々（むかしむかし）、ある所に怪奇が居ました
怪奇は、濡れ衣の罪を着せられた姫様を救うため、その衣を纏いました

纏った怪奇は、罪を演じました・・・それを知ってるのは、怪奇をよく知る者でした

しばらくして怪奇は、その一人と戦い、最後は知る者達により白い箱に封印されました・・・

怪奇を知らない者達からは、封印された箱のことを欲望の箱と名付けられた・・・

欲望の箱は、怪奇を知る者達の一人が旧世界に持っていかれたようです・・・

魔法世界の一冊の本『一

人の怪奇の最後』から一部抜粋

俺、復活！

・・・ナニコレ、もう一度言う
ナニコレ・・・

俺は、復活したらしい
場所や時代は分からないが・・・
分かっているのは一つだけ、俺の目の前に言い争っている、いかにも
陰陽師を表す服装をした男達が居ただけだ

「えっと、お話し中悪いがアンタ等が俺の封印を解いたのか？」

俺が聞いてみたら一人の陰陽師が俺にこう言ってきた

「蘇ったな、アンタに頼みたい事が有ってな」

頼みたい事？

「俺達に協力してくれ」

「協力？」

「ああ、護衛をな」

「・・・は？」

聞くと西洋魔術師が日本に侵食したらしく
陰陽術を使う、この陰陽師達は、お偉さんの娘を誘拐し、その娘さ
んに有る、魔力を使い、鬼神を復活させて魔術師達を日本から追い

出したいらしい

娘は、俺が復活する前に誘拐は成功したそうぞ

「つまり俺を復活させた訳は、その奪還する奴等からお前らを護れば良いのね……」

「そうぞ、出きるか？」

「うーん、出来るだけやるけどさ……」

俺も一応、お前らの敵対する西洋魔術の一つで創られたんだぜ
敵対する魔術を使用して大丈夫なのか？」

「ぞ、それは……」

「それにさ……お前らにも肉親、家族が居るだろ？
もし死んだとしたら残った遺族を泣かせる気か？」

「……」

「ま、とりあえずさ……腹を割って話せば良いだろ
つて、無理だからこんな事をしちまったんだよな」

「ま、もうちよい粘って考えるよ」

と俺は言い、隣の部屋に向かう

で、向かって部屋に入ったら腹を蹴られた

「……」

しかも、五歳ぐらいのお嬢ちゃんに

「あー、お嬢ちゃん？俺は何もしないよ」

「五月蠅い！このちゃんに近づくな！」

俺はポカポカ殴ってくるお嬢ちゃんの首元を掴み、後ろに居るもう一人見つけた

「おじさん誰？」

と二人目のお嬢ちゃんは聞いてきた

「おじさん？おじさんは、オジサンだよ」

「そっか、そっか、オジサンか
よろしゅうな」

「お嬢ちゃんの名前は？」

「ウチ、木乃香！で、オジサンが首を掴んでる娘がせつちゃん
刹那ちゃんやで」

「よろしく……さてオジサンは今、暇でさ」

「あ、ウチも暇や」

「へえ、奇遇だね」

「あの」

すると首を掴んでいた女の子は、おそろおそろ手を挙げ、「こう言った

「とりあえず降ろしてな」

「あ、すまん」

俺は刹那ちゃんを降ろす

「んと・・・じゃあ、遊ぶか？」

俺はセルメダルを五十枚出した

「「お金？」」

「お金じゃないよ、メダルだよ」

「で、メダルで何すんの？」

「おはじき・・・はどうだ？」

「「「さんせ」」」

で、しばらく遊んでいたら先程の陰陽師が現れ、「考え直す為に自
分達一同、自首する」と言ってきた

「ま、良いんじゃないか？」

俺は立ち上がり、木乃香と刹那を担ぎ、後についていく

で、着いたのがデカイ屋敷だった

「……ん、そういえば木乃香、木乃香のお父さんの名前は知ってる？」

「おとーさまのお名前？近衛 詠春や」

「……なるほどね」

日本に居る訳は、詠春が俺を封印した箱を持って日本に帰ったのかなるほど、なるほど……

つか、俺の場合は封印が昨日の出来事みたいだから……

なんか変な感じだなあ……

詠春、老けたなあ

俺は今、客間に居る

理由は、俺が封印された箱から出てきたと近くの人に言つと顔が真っ青になり、慌て「長あおさああ」と行つてしまった

その後、刀を帯刀している剣士達に囲まれ、案内してもらい

客間に着いた訳だ・・・

ま、良いか

お茶菓子やお茶を出してくれたし〜

するとガラリと襖が開き、一人の男性が入ってきて俺の目の前に座る

「久しぶりです、グリード」

「！お前、詠春か？」

「はい、そうです」

「あー、なるほど・・・老けたなあ」

「ハハハ、老けましたか？」

「ああ、老けたよ

でも何故、敬語を使うんだ？とりあえず止めてくれ」

「すみません、職業柄の癖で」

「職業柄の？」

「はい、私は今『関西呪術協会』の長を勤めています」

「な、ナンダツテエエエ！」

「・・・で関西なんちゃらって、なんだ？」

すると詠春は器用にずっこけた

「おい、ずっこける事は無いだろ？」

だって俺は今まで日本に来たことは無いし」

「あゝなるほど、それで」

「すまん・・・けど簡単に言えば、陰陽師達の拠り所みたいな物だ
る？」

「まあ、そんな感じですが・・・
さて本題に入りましょう・・・娘、木乃香を救ってくれて感謝しま
す」

と言い、詠春は頭を下げた

「いや、頭を上げてくれ・・・俺は偶然あの場所に封印を解かれた
んだ
運が良かったただだよ」

「そうですか」

詠春は頭を上げた

ん？そういえば・・・

「なあ、詠春・・・木乃香ちゃんを誘拐した一味は、どうなるんだ？」

「ふむ・・・彼等の気持ちは理解しているのですが、しかし、私では手が出し辛いのです」

「出し辛い？」

「『関東魔法協会』の長は、私の義理の父・・・近衛 近右衛門が管理してるんです」

「あー、そりゃー・・・やりにくいなあ」

「はい・・・」

「そういえばアंक達は？」

「アंक君達は『関東魔術協会』に居ます
学園都市の警備をする代わりに学費や生活費を免除してもらってる
そうです」

「そっか・・・あ、アリカ姫とナギは？あの二人は、もう結婚してるだろ！」

「・・・」

「ん？どうした」

「アリカ姫とナギは、その・・・行方不明です」

「・・・行方不明？」

「はい、すみません」

「あ？なんで頭を下げる・・・別にお前のせいじゃない

・・・しかし行方不明か」

「あ・・・話が変わってましたね、あの一味は懲罰を与えますが軽い物にしますから、ご安心ください」

「ん、分かった・・・『関東魔法協会』か

よし、潰してやるのか？」

また、詠春がずっとこけた

「どうした？」

「お前は、なんで、いつも急に言うんだ！このアホグリ！」

「アホグリ！？おまつ、酷ー！！」

「貴様など栗になってしまえ！」

「無理無理！無理だから！」

つか詠春さん、敬語が無くなりましたよ？

翌日、正門

「さてと、行くよ」

「良いんですか？」

「バカ」

俺は詠春に指を指し

「俺は悪役、お前は長……だろ？」

「全く……悪役の考えは、捨てないんですね」

「じゃ、そういう事で」

「はい、スパイ活動をお願いします」

「任された！あ、俺は名を変えるからな」

「名を？」

「おう、俺の今からの名は『ジエイド・シグナル』で頼む！じゃあな！」

俺は駆け足で階段を降りた

「さて、とりあえずヤミーでも作るか」

俺は木にセルメダルを投げ、二体のヤミーを造り出した

二体ともアニメに出てくる『ネギま！？』のオリジナルキャラ、カエルのモツと猫のシチミに似たヤミーを出した

「あつね、ここは何処ですか？」

「山の中じゃ」

二体は話し合い、俺を見て頭を下げる

「初めましてモツヤミーです」

「シチミヤミーじゃ」

「よろしくお願いします」

「あ、こちらこそ」

そして二体は俺の肩に乗り、俺は歩きで関東に向かった

詠春、老けたなあ（後書き）

モツとシチミを出しました

まあ、あれです・・・ネギで言えばカモみみたいな存在でグリード（ジェイド）の使い魔的存在です

関東魔法協会の場所に着いた、とある人物と会った

・・・さて、関西から関東までヒツチハイクや走ったりして速くも一ヶ月経ち、関東の『関東魔法協会』本部、麻帆良学園まほろに着いた

なるほどな、麻帆良学園は表向きは学園裏向きは魔法協会って訳か

そう考えてると上着の両ポケットからシチミとモツが出てきた

「やっと着きましたか・・・いー意味で」

「お疲れ様ですにゃグリード様」

二人はアクビをしながら俺の肩に乗る

「シチミ、グリードは止める・・・とりあえず名は隠してくれジエイドって言ってくれ」

「分かりましたにゃ」

「さて、お前達に命令を出す」

「それは、どんな事をすれば良いんですか？」

「とりあえず麻帆良学園の裏の密談を見つけ、聞いた後に報告・・・
バレルなよ」

「了解」

「それと俺の息子達に会ったら俺が復活した事は黙ってくれ」

「どうしてですか？悪い意味が有るのですか？」

「モツ、俺が復活した事がバレたら、アイツ等が一カ所いっかしよに来てみる、この学園に居る裏の奴等（西洋魔術師）が変だと思い、俺に気付いて来るかもしれん

だから野良妖精ふりをしろ・・・」

「分かりました」

「了解しましたみや」

「なら行け」

そして二体共、俺から離れて草むらに入る

「ん、この姿だと知り合いにバレたら怖いしな、変装でもするか・・・」

俺は、近くの公衆トイレを探すが見当たらず、しばらく歩いてく

「んー、平和だ」

俺は、セルメダルを一枚出して親指で弾いて、掴み、弾いて、掴みの繰り返しを行っていた

が・・・

「あ……!?!」

予想外な事に掴み損ねてしまった
そしてコロコロと転がってしまい、とある男性の靴に当たってしまった

男性は拾って首を傾げ、俺の方を見て驚きの顔になった

ん？驚いた？

えっと、つまり……

俺の方を見て驚いた

考えられるのは魔法関係者

元SSSの封印された罪人と認識した

「ナニコレ……」

俺は、すぐさま男性に背を向けて逃げた

「あ！ちよつと！」

男性は俺を引き止めたが、俺は待たない
何故ならば！面倒だから！

「待つてくださいグリードさん！」

「ほら、やっぱり関係者だ！……え？グリードさん？」

俺は、足を止めて後ろを見ると男性が近づいて来て、俺にセルメダ
ルを渡してきた

「お、お久しぶりです」

「久しぶり？君は誰だい？」

「僕ですよ、高畑です」

「・・・タカミチ青年かい？」

「はい」

タカミチ青年・・・当時『紅き翼』の一員、ガトウの弟子だった

終戦後『紅き翼』からガトウと一緒に離脱したはず

「タカミチ青年、大きくなったねえ・・・
おじさんから千円あげよう」

「いや、それより何故・・・学園に？」

「ハツハツハ、詠春の元に居る過激派の奴等が封印を解いたのさ！」

「・・・ツツコミを入れた方が良いですか？」

「いや真面目に本当なんだって」

「そういえば、ガトウ元気？」と言つとタカミチ青年は

「亡くなりました」

と答えた

「・・・そうか、逝ったか」

「はい・・・」

「あ、タカミチ青年・・・あの娘は、どうした？」

「今の所は、家で大人しくしてます・・・
来年は初等部に通います」

「寿命が元に戻って、進み始めたって訳か」

「はい」

「なら今は、原作の九年前か」

「原作？」

「こつちの話だ・・・さて俺は鬼が来る前に変装しよう、またな！」

「あつ、グリードさん！」

俺はタカミチ青年と別れ、公園に有る公衆トイレの個室に入り、俺はシンケンジャーの一人、源太の姿になる

さて、スパイ活動開始だ

シチミとモツ、凸凹(デコボコ)コンピは密偵か

シチミ視点

私達は今、世界樹の樹の上に居て、魔法使い達の集団を見た

中にはアंक様、ウヴァ様、カザリ様が居た

何故、ここに居るのかと言うと、私達は人払いの魔法を感じ取り、
今ここに居る

すると長い頭をしている人間が笑いながら魔法使い達の前に来て話をし始めた

「諸君・・・忙しい中、集まってくれて感謝する」

つか、あの頭で人間って言えるのかにや？
どちらかと言えば妖怪ぬらりひょんだにや

「あの頭は健康的に大丈夫なんでしょうかね？」

「知らないみゃ、あ・・・アंक様が喋り始めたにや」
シチミ視点アウト

アंक視点

「おい、ジジイ・・・俺達は暇じゃないんだ！
燃やし尽くしてやるっか？」

「アंक君は物騒な事を言うようになったの・・・
ああ、報告を頼むよタカミチ君」

そしてタカミチが目の前に出て、こう言った

「元SSSランク、罪人グリードが復活しました」

オヤジが？

おいおい、やっとか・・・契約解除する事が出来る

やっとか・・・

「なら、僕達の契約は終了だね・・・」

「ああ、ダルい仕事だった」

カザリとウヴァ、確かにそうだな

するとジジイが、慌てる

「ふお！？今からかの！？しばらく・・・もうしばらく学園の警備
をしてくれんかの？！」

「ふざけるな、ジジイ・・・契約では親父が復活したら警備から身
を退くと言ったはずだ！

それに契約書も同類な事を書いたのを忘れていたか！！」

とキレるウヴァ

「そーだね、僕達はもう学歴も手に入れたから利益ないしね、アंक」

「そうだなカザリ、だが別の権利をくれるなら、話は別だ」

「別の権利？」

「そうだ、ジジイ・・・俺達コアメダルの所有者に何もしない事、緊急時の時以外は呼ばない

それだったら良い、が・・・呼び出した理由は一から十を説明してもらっからな」

「アंक！お前！」

「待ってウヴァ、アंक・・・君も悪^{ワル}だね」

「どうだジジイ、俺達の手を借りる為に契約を結べ」

「ぬう・・・」

少しばかり相手の有利な条件だが、こちらには最大の利点『コアメダルの所持者』に手を出さない事と『緊急時以外は手伝わない』と
いうのが有る

「・・・分かった、契約しよう」

「交渉成立だな」

アंक視点アウト

シチミ視点

「と、いう事が有りましたみゃ」

「ご苦労、アंकもアंकで嫌な条件を出したね・・・」

場は夜、私は寿司を握ってるグリード様の屋台の椅子に座ってる

「あ、あとモツから念話で『家』の登録も」

「住む家を手に入れたのか？」

「そーらしいですみゃ」

私とグリード様が話しているとモツが帰って来た

「いやー、疲れましたね・・・良い意味で」

「ところでジエイド様は、なんで屋台を造ったうえに寿司を握ってるんですかによ？」

「へいらっしやい！何を握りますか？」

「とりあえずカエルの開きで、お願いするによ」

「へー!？」

「すみません、猫のお客さん・・・衛生上ダメです」

「ほえ!?!」

「モツ、お前・・・ウザイ」

「ぽえ!?!」

「とりあえず握ってる理由は、趣味だ」

えー、趣味で握ってるの？

そう心に思いながらグリード様の握った寿司を食べた
味は美味かった・・・

追伸、モツは驚くと身体の色が変わる

ゴールド寿司は今日も暇です

あれから五年経った、俺はアクビを噛み殺し、空を見ている

「暇ですなあ〜」

と屋台の屋根に座り、お茶を飲むモツ

「暇すぎてアクビがでるにや」

と魚の切り身を食わえてるシチミン？魚？

「おい、シチミン・・・お前が食ってるのは、マグロか？」

「そうですにや」

「・・・シチミン O H A N A S I I しようか？」

「だが断る」

「なん・・・だと？」

そんな日常茶飯事の会話に使う有力漫画の台詞をしていたら、
暖簾のれんをくぐって人が入ってきた

「いらっしやい、何に・・・ん？」

入ってきたのは、ガメルとメズール、そして魔法世界の姫・・・いや

『元』 姫、アスナ嬢ちゃんだった

「あら、美味しそうなタコね・・・」

メズール、それは共食いじゃね？

「アスナ、今日は、俺の、奢り、たくさん、食べ、ろ」

「うん、ありがとうガメル先生」

ガメル先生か、立派になったな、ガメル・・・お父さん嬉しい！

「ちょっと、板前さん・・・タコの握りを頂戴な」

「へ、へい！ちょっとお待ちを」

だからあ、メズール！

お前が食ったら共食いだろうが！

「あ、私はマグロ」

「オレ、イカナ」

「分かりやした、へい！お待ち！タコの握り！」

「いただきます」

そしてパクパクとメズールは食べる

「マグロ、お待ち」

「わーい、いただきます」

「ところで、お二人は・・・小さなお嬢さんの先生なのかい？」

今の発言は俺だ

「うん、オレの、教え子、コイツ、体力スゴい」

「えへへ、ありがとうガメル先生」

「へー、へいイカお待ち」

「キタキタ、いただきます」

しばらくすると、タカミチがやって来て、ガメルとメズール、そしてアスナ嬢ちゃんを連れて去っていった

「ふー、バレないで良かった」

俺は額にかいた汗をタオルで拭き、下を向いて昼飯を作る

「そうだね、グリード」

っ！！？

俺は顔を上げ、暖簾の向こう側を見る

「入って良いかい？」

「勝手にしな、聞いた声だしな……」

そして暖簾を潜り、一人の白髪の少年が入ってきた

「まさか、お前が来るとは……」

いや、復活しているとはな……」

「構わないだろ」

「十数年前に倒したと思ったら……しぶといね」

「誉め言葉と受け取っておくよ」

「……三人目だな」

「ああ、そうだね」

「それで俺に何の用だ？」

「簡潔に言おう、魔法世界を救わないか」

「魔法世界を救わないかって言っても俺達が」

「そう君達が世界を救った

けど危機が、また来ている」

「詳しく話せ……えつと名前は？」

三番目と言った方が良いのか」

「そうだね、仮の名でフェイトと呼んでくれないか」

「フェイトね・・・」

俺の今の名はジェイドだ」

「じゃあジェイド・・・話そうか」

「なるほど、だいたい分かった

つまり俺のコアメダルが必要な訳か」

「そう、君の役割はこんな感じだ」

「・・・考えさせてくれ、数年後また来てくれ」

「・・・ま、そうだろうね

世界を変える、救う事になる大仕事だしね」

「で、寿司を食っていくか？」

「寿司か、美味しいのかい？」

「日本文化ナメんなよ」

しばらくし、フェイトは帰って行った

サービスにコーヒーを淹れたら「不味い」と言われた

失敗したかな？

それとフェイトが三番目だと言ったのは、アイツが三回蘇った……
いや創られた存在だからだ

一回目は俺が殺し、二回目はナギ達と……

「アイツは、あと何回現れるんだ？」

はぁ……ため息出るなあ

時は飛んで、アスナ嬢ちゃんが中学一年になった頃

また時は飛んで、夜・・・

俺は学園長室に忍び込み、魔法関係の書類を盗んでいた

「っと、有った・・・

何々（なにになに）、『契約者候補クラス』・・・なんじゃこりゃ？」

俺はペラペラと書類をめくると、クラスに居ると思われる生徒達の写真、名前が有った

こりゃまた、ご丁寧なこつて・・・

ん？これは・・・アスナ嬢ちゃんか？

それに詠春の娘、木乃香嬢ちゃん

その護衛の刹那嬢ちゃんが居る・・・

変だな、確か詠春は木乃香嬢ちゃんを魔法関係から退かしている
木乃香嬢ちゃんが、この学園に居る訳は小学五年生くらいだったはずだ

刹那嬢ちゃんもたしか同じぐらいのような・・・

ちなみに『はず』なのは時間の感覚が分からなくなってきたのだ

グリードになって、言っておくが本名じゃないぞ

まあ、感覚が狂ってきたのだ

千年も生きてればそうなる・・・君もいずれ分かるさ

「例えるなら夏休みの感覚だな」

って何で発言したんだ俺は

その後、部屋から抜け出し、とある森の木の上で寝る事を思っていたら銃声が聞こえた

「と言っても、裏の関係者しか聞こえない音払いおとほひの符を使ってやるから一般人は聞こえないだろうな」

俺は、その場に行くため屋台を引いて、駆けた

?視点

クツ、いつもより数が多い!

私は学園の警備を刹那と一緒に行っていた
警備と言えども相手は人間ではなく怪奇という所だ

チツ、愛銃に弾が詰まった!

「刹那!大丈夫か!」

私は後ろを見るとコチラに飛んで来る刹那

私は刹那を掴み、抱える

「うつ・・・すまない、龍宮たつみや」

そして謝ってくる刹那

「いや、平気だ・・・が」

「万事休す・・・か」

私は肯定の意味で頷く

すると私達に影がかかり、私達は顔を上げる

そこには、怪奇の一体・・・鬼がデカイ棍棒を振り上げてる

「・・・ここまでだな」

「ああ」

私達は諦め、覚悟を決め、目を瞑った

「その覚悟、見事」

と、声がし、私は目を開けた

場所は、木の上で、私達の隣には全身緑のマスクを被った人が居た

「あ、あなたは？」

「なに、刹那嬢ちゃんちょっと知り合いでね、助けただけさ」

「刹那の？」

私は目を開けた刹那を見た

刹那は「え？誰？」的な顔をしている

「まあ、私が倒すから心配するな」

そして木の下に降り、鬼の顔を蹴り飛ばす謎の人

「さて、名乗らせてもらおう・・・」

I am ninja of ninja!

緑の光弾、天空忍者！シュリケンジャー！

そして名乗ったのちに、緑のボールを出した

「 参上！」

?視点アウト

グリード視点

「last!ハッ！」

俺は、狐の怪奇を殴り消した

「・・・お前は何者だ？」

すると先程助けた女の子？が俺に銃を向けてきた

「ん、私は先程名乗っただろ？」

ninja・of・ninja

天空忍者！シュリケンジャーって」

「ふざけてるのか？」

「真面目だが」

「・・・まあ、今回は見逃すが・・・次回は捕まえる」

「いいのかい？」

「ああ、助けられたしね
今回だけだよ」

「Thank You、では・・・さらば！」

俺は煙玉を出し、地面に叩きつけ、その場を去った

去ったのち変身を解いたのは良いが、屋台が無く、代わりに『撤去
しました』と書かれたが有った

「モツ、シチミ・・・」

俺の留守中に何が有った」

「市役所の人撤去していったにや」

「いやー、人生は上手く回りませんね
・・・悪い意味で」

「ハツハツハ・・・畜生」

不幸だ・・・

まあ、とりあえずバイトを探そうかな・・・

久しぶりの対面？

さて、俺はとある部屋に居た理由は……

「何故、貴様が居るんだ！『欲望の怪奇』！」

メンドーな奴等、魔法関係者に尋問されてます（わらい（棒読み））ま、どうしてこうなった！とW風に思った方も居るでしょうなので簡易説明！

・暇だ！よし、なら会議の内容を直接に盗み聞きしてやろう！と超忍法『地獄耳』で盗み聞き……

・が、助けた刹那嬢ちゃんじゃない女子生徒に気付かれて狙撃されたちなみに頭を撃ち抜かれ、気絶

・起きたら拘束されて、暗い独房に居た

・そして今、尋問されてます

「マジで面倒くさい」

「面倒くさいだと！？貴様、今の立場を確認してみろ！」

俺が面倒くさいと言うと、黒人系の男が言う

「ハイハイ、魔法拘束具を付けられる状態だね」

「判^{わか}つてるなら良い！
で、貴様が何故ここに居る！」

「暇、知り合いを訪ねてきた、以上」

「き・・・キサマアアア！」

「キレるなよ、あれ？まさかのカルシウム不足？」

「ウガアアア！」

「ヒヤッハー、発狂大佐！」

あれ・・・話が、ずれてきたな

「グリードさん、彼で遊ばないでくださいよ」

するとタバコをくわえながら部屋に入ってきたタカミチ

「タカミチ、これ（手錠）を外してくんない？」

「いや、グリードさん・・・貴方ならすぐに破壊出来るはずです」

「めんどくさい・・・破壊したらコイツら襲ってくるかもしれない
し」

ちなみに俺の周辺には、タカミチを含めた五人の魔法使いが居る

「グリードさんなら軽く相手を出来るでしょう？」

「老兵に働かせるの?」

「老兵って・・・まあ良いです
どうして、この学園に?」

「アイツの息子が来るって情報を聞いて、駆けて来た
あ、これは文字通りね」

「・・・」

タカミチは頭を片手で抑え、タメ息を吐いた

「あ、そうだグリードさん」

とタカミチは何か思い出したように俺の顔を見た

「なんだ?重要な事なのか?」

「実は・・・アナタの息子さん達が」

するとドタバタと駆け足が聞こえ、バンと扉が破壊された

「なに!?何が有ったのタカミチ青年!!」

「あー、御愁傷様です」

そしてコインが弾く音が三つ×5聞こえた

「えっ・・・!!」

『クワガタ！カマキリ！バッタ！
ガータ、ガタ、ガタ、キリバ、ガタギリバ！』

『ライオン！トラ！チータ！
ラタ、ラタ〜ラトラータ！』

『サイ！ゴリラ！ゾウ！
サゴーズ・・・サゴーズ！』

『タカ！クジャク！コンドル！
タ〜ジャ〜ド〜ル〜！！』

『シャチ！ウナギ！タコ！
シャ、シャ、シャウタ！シャ、シャ、シャウタ！』

そしてドアを潜ってきたのはオーズコンボ×5でした

「親父い」「お父さん」「オヤジい」「父さん」「お父様」
何か言うことないか「しら」？「」

「ウエ！？ちよつと息子と娘達よ！久しぶりの対面なのに酷い！」

「そんな事は、どうでも良い
言うことないか？」

と俺の意見を殺すウヴァもといガタギリバ

「一回考えなよ」

とカザリことラトラータ

「オレ！今、怒ってる！」

とガメルことサゴーズ

「お仕置きよ？」

とムチを構えるメズールことシャウタ

「いや生なまぬる緩い

豪華に燃やす」

とタジャドルのアンク

「あの皆さん・・・怖いよ？」

「「「「「「「「「「「「

「すみません、言います・・・すみません」

「「「「「なら良い」わ「「「「「

「反省はしている、だが私は心から謝らない」

「「「「「「「「「「「

ティンティンティン！

『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『『
スキャンニングチャージ！』』』』』』』』』』』

「ちよっ！アंक！こんな所で必殺技は！？」

「うるせえよタカミチ！このクソ野郎をブツ飛ばす！」

そして、その言葉を聞き・・・、俺は真木グリード完全体になる

「ちよっ、まっ！」

「待たねえ！」

ああ・・・詰んだ

全員のキックが俺の目の前に！

ギャアアアアア！

ジェイド(グリード)の紹介&メダル所持者紹介

本名・・・グリード

偽の名・・・ジェイド シグナル

身長

185センチ

体重

60キロ

能力

魔法使用

ヤミー製作

グリード体の特殊能力

グリード化

変身できるヒーロー

オーズ「プトティラ」(固定)

オーズ「ブラカワニ」

シュリケンジャー

得意な魔法の属性

氷、風

外見

テイルズのレイヴンにそっくり

性格

ややレイヴンに似た性格、たまに真面目

特技

変装、忍術

詳細

グリードになる前、前世では坊主であった

とにかく東映の特撮が好きで、特にスーパー戦隊ではハリケンジャー、仮面ライダーではオーズが好きである

女神の部下に殺されたのに許してる、まあ・・・ちょっとだけ、ずれてる方

主人公はレイヴンの事は知らない、女神が勝手に外見を決めた

原作知識は『ネギま』の修学旅行編までしか知らない

所持コアメダル

- ・恐竜系十枚
- ・爬虫類系十枚
- ・パンダ・カンガルー
- ・人工コア系十枚「仮面ライダーコアに有ったコアメダル」

他のメダル所持者

アング

- ・鳥類系十枚

ウヴァ

・虫系十枚

カザリ

・猫系十枚

メズール

・水棲系十枚

ガメル

・重量系十枚

?

・爬虫類三枚

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4735v/>

転生した男と魔法先生

2011年9月29日21時16分発行